

平成17年度「文化庁日本語教育大会」
(東京大会)
日本語教育研究協議会

平成17年8月4日(木)
昭和女子大学

主催



文化庁

目 次

○プログラム

○日本語教育研究協議会 各分科会の協議内容

第1分科会「親子参加型の日本語習得支援の方法について」 2

第2分科会「日本語教育のための社会言語学 ―地域の言葉の扱い方―」
. 10

第3分科会「異文化コミュニケーションの日本語教育への活用」 16

第4分科会「JSLカリキュラムの理解と地域における支援の在り方」
. 22

第5分科会「地域における日本語学習リソースの活用について」 26

第6分科会「日本語学習支援に役立つ言語技術教育の技法について」
. 30

プログラム

平成17年8月4日(木)

13:30 ~ 15:00 日本語教育研究協議会(第1~3分科会)

15:00 ~ 15:15 休憩

15:15 ~ 16:45 日本語教育研究協議会(第4~6分科会)

日本語教育研究協議会
各分科会の協議内容

第1分科会（グリーンホール）

- テーマ：「親子参加型の日本語学習支援の方法について」
○趣 旨：文化庁委嘱事業「親子の日本語教室」の活動と事業から得られた知見を紹介しながら、親と子供が共に学ぶことの意義について考え、今後の地域における活動の参考とする。
○講 師：伊 東 祐 郎（東京外国語大学教授）（敬称略）

伊東 祐郎（いとう すけろう）

東京外国語大学留学生日本語教育センター教授

専 門：日本語教育学，応用言語学（テスト研究）

略歴等：米国西イリノイ大学大学院言語教育学修士課程修了後，アラバマ大学外国語センター，並びに同大学衛星放送センターにて日本語教育を担当。平成4（1992）年から現在まで東京外国語大学での日本語教育に従事。平成8（1996）年から4年間，旧文部省教育助成局海外子女教育専門官（併任）として，外国人子女に対する日本語教育関連施策への助言及び企画等に参加。日本語能力試験の分析，並びに日本語口頭能力試験の研究開発に従事。現在，放送大学テレビ「日本語Ⅰ」，同ラジオ「日本語Ⅱ」を担当。日本語教育学会副会長を務める。平成14（2002）年度から文化庁が設置する「学校の余裕教室等を活用した親子参加型日本語教室の開設事業企画・評価会議」の座長を務める。

主著書：『外国人児童生徒のための日本語指導

－カリキュラム・ガイドラインと評価－』（共同執筆，ぎょうせい）

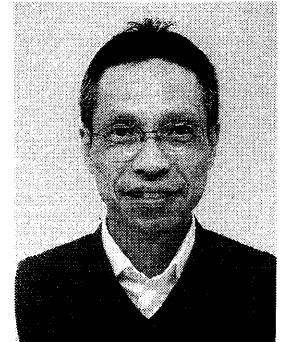
『日本語Ⅰ』『日本語Ⅱ』放送大学印刷教材

（共著，放送大学教育振興会）

『言語テスト概論』邦訳（監訳：スリーエーネットワーク）

『やってみよう「参加型学習」！日本語教室のための4つの手法

－理念と実践－』（共著：スリーエーネットワーク）



<メモ>

<メモ>

1 現状

山形県の外国人登録者数：約7千人(中国39.2%韓国・朝鮮29%フィリピン11.3%ブラジル6.5%)

- ・山形県の外国人の4割は日本人男性と結婚した外国人配偶者であり近年、国においてきたこどもを呼び寄せるケースが増えている。
- ・来日して間もなく出産した人のなかには、日本語を学ぶ暇もないまま育児に追われ大きな不安を抱えている人もいる。また、外国人の母親に子育てを任せることに不安を持っている家族も多い。
- ・一昨年まではこどもが日本語を学ぶことのできる教室がなかったが、現在は山形市とその近隣で「こども日本語習得支援事業」が行なわれている。
- ・山形市や他のいくつかの市町村では、学校に母語話者(韓・中)やボランティアを派遣して日本語指導をしているところもあるが、十分とはいえない。

2 取り組み

1) 2003年度親子参加型日本語教室実施概要

- ① 開催日時平成16年7月29日(火)から8月18日(月)1日4時間×15日間 計60時間
- ② 参加者 親のクラス22人 子どものクラス10人(0歳~12歳)子どものクラスは、中級3名、初級5名、託児2名
- ③ 日本語教室の内容 (親・子ども) ・日本語の学習
(親子) ・ゲーム、大型絵本等を通して親子で日本語を身につける。

2) 2004年度親子参加型日本語教室実施概要

- ① 開催日時平成16年7月26日(月)から8月13日(金)1日4時間×15日間 計60時間
 - ② 参加者 親のクラス 14人 子どものクラス 4人(0歳~1歳)
 - ③ 日本語教室の内容
(親) ・日本語の学習・日本の物語を知り、自分の子どもに読み聞かせができるように練習する。
(子) ・保育者との遊びの中から、たくさんの日本語に触れる。
(親子) ・親子でお話を聞いたり、一緒に手遊びをして楽しむ。
- ・幼児の場合、小学生の場合、中学生の場合、それ以上の年齢の場合で内容を代える必要があるが、中学生以上の場合には大人と一緒に学習した。
 - ・夏休みの利用(小学生、保育園児)を考えて短期集中形式にした。昼食も含み1日5時間、週5日間の教室活動で、学習者は日本語に慣れ、自信を持って発話できるようになった。短期間での取り組みは、学習者にも、支援者にも負担は大きいですが、日本語の習得の面でも、学習者同士の連携の面でも効果は非常に大きい。
 - ・小学生の場合学習の中に「エンカウンター」等を取り入れて、仲間と一緒に学ぶ楽しさ等も体験させた。
 - ・親と子が家に帰ってからも一緒に遊べるようにとの目的で、親子活動を多く取り入れた。日本人の子供たちが知っている手遊びや歌、昔話、絵本などを親子で楽しむというもので、どの年齢層からも大好評だった。

3 今後の課題

- ・日本語教室や育児支援についての情報が十分に親に届いていない。必要な情報がすぐに手に入る

ような仕組みづくりが急がれる。

- 行政や支援団体同士の連携など共同体として支援を結び、ネットワーク作りをする必要がある。歌を教えたり、絵本を読んだり、子育て中の相談相手になったり、と日本語を教えるだけでなく様々な支援ができることを多くの人に知らせていかなければならない。
- 行政には外国人の親子への支援の重要性を理解し現状の把握と、柔軟な対応が望まれる。

豊中市における親子参加型日本語教室の現状と課題

1. 背景

豊中市 (2005.5.1) 人口 387851 外国人登録者数 4991 (韓国・朝鮮 54% 中国 22% アメリカ フィリピン ブラジル 2~3% タイ イギリス ペルー カナダ 1%強)

財団法人とよなか国際交流協会

1993年設立 とよなか国際交流センター併設 (地上3階/地下1階) 市北部地域・市役所近隣

1998年ごろよりの変化: 外国人女性と子どもをフォーカスした事業への転換

- ・調査・研究事業『在日外国人の母子保健』妊娠・出産・子育ての増加
⇒外国人母子保健相談会・外国人ママの交流会

- ・相談サービス事業 通訳から在住外国人女性を中心とした多言語スタッフの雇用

- ・日本語教室+講師制度を廃止して、市民参加型の日本語交流事業へ

外国人支援関係事業の充実と集中化⇒協会事業の仕組みからこぼれる人びと (物理的/立場的)

市の国際交流の拠点となる国際交流センターで行われている日本語学習の場には年間延べ3000人近い成人外国人学習者が参加し、同時に延べ300人近い子どもがその間保育に来ている。うち外国人親子の数は20組以上である。が特別この親子のためのプログラムを行って来てはいないことがあげられている。(「財団法人とよなか国際交流協会 2001年度事業報告書」より)

2. 文化庁委託を受けた豊中市親子参加型日本語教室実行委員会の行ったモデル事業 (2002~2004) の内容 その工夫と成果

豊中市親子参加型日本語教室								とよなか国際交流協会関係事業			
	開催場所	想定対象	コーディネーター	ボランティア	開催回数	外国人親参加者	外国人子ども参加者	担い手養成事業	外国人ママの交流会	とよなかにほんご	多文化こども保育
2002年度「とよなか・おやこでにほんご」	とよなか男女共同参画推進センター・ブレイルーム (阪急豊中駅上)	とよなかにほんごの参加が子どもが小さい等の理由で継続できない親子。	とよなかにほんごボランティアに依頼	既存の日本語ボランティア(旧・現)保育ボランティアに依頼	24回	101人(日本人ボランティア150人)	101人(日本人の子ども45人)		7回開催外国人参加者のべ101人	145回開催外国人の参加者のべ2341人	外国人子ども参加者のべ200人
2003年度「しょうない・おやこでにほんご」	豊中市立庄内図書館3階研究室	市南部地域の外国人親子へのアプローチ(初めて)	多言語スタッフとよなかにほんごアドバイザーに依頼	多言語スタッフ 地域ボランティア(少)に依頼	52回(34回/28回)	177人(日本人ボランティア55人)	133人(日本人の子ども28人)	子育てしている人の子どものと一緒に国際理解講座4回のべ58人参加	7回開催(うち2回庄内開催)外国人参加者のべ101人	143回開催外国人の参加者のべ2623人	外国人子ども参加者のべ572人
2004年度「しょうない・おやこでにほんご」「おかまち・おやこでにほんご」	豊中市立庄内図書館3階研究室 豊中市立岡町図書館	それぞれの地域での外国人&日本人親子の活動の持続可能なシステムづくり	多文化子育てコーディネーターと協会職員	多文化子育て支援ボランティア養成講座受講者	69回(34回/35回)	219人(日本人ボランティア527人)	197人(日本人の子ども176人)	多文化子育て支援ボランティア講座3回のべ114人参加	6回開催(うち2回庄内開催)外国人参加者のべ114人	135回開催外国人の参加者のべ2217人	外国人子ども参加者のべ457人

子ども連れボランティアのピア的効果/ボランティア活動への継続的参加の課題

同一空間の中での母子活動の相乗的効果/母語保持への課題

エンパワメントの磁場作り/外国人の主体的活動の促進と地域への課題

3. 今後の課題

地域の多文化共生を推進する拠点の入り口として

地域の公的場の役割

参加と市民活動

ディスエンパワーされているものの視点からはじめる地域づくり (女性・子ども)

横浜市「上飯田地区親子参加型日本語教室」の活動

I. 現状： 現在、横浜市の公立小学校には約1,500名弱又、公立中学校には約700名弱の外国籍児童生徒が在籍しています。当上飯田地区は横浜市でも外国人定住者の集住地区で知られています。この地域の公立小・中学校にも併せて200名は優に超える外国籍児童生徒が学習言語に苦勞しながら勉強しています。各学校内においては教育委員会が設置する日本語教室や国際教室、又、当地域には、外国人定住者とその子供達を対象とするNPO団体他の日本語教室や学習室もありますが、必ずしも日本語の専門家が指導にあたっているわけではありません。外国人定住者やその子供たちの自立支援には日本語の専門家による総合的な日本語の指導が必要です。

II. 取り組み：「親子参加型日本語教室」の活動内容(平成14年度～16年度)

■開催形態1：「子供の日本語教室」(実施期間：平成14年度～16年度の3年間)

日時： 6月, 11月, 2月, 毎週火, 水, 木曜日の放課後 1日90分×10日×9回

活動場所： 地域の公立小学校の国際教室, 図書室, コミュニティーハウス(公立小学校に併設)

受講者数： 保育園児4名, 1年生61名, 2年生35名, 3年生～6年生14名

クラス： 低学年クラス2クラス(保育園児と1,2年生) 毎回45分授業

高学年クラス1クラス(3年生～6年生) 毎回45分授業

学習内容： 教科書の予習や復習, 算数の加減乗除を文章題にしたり, 九九の定着など基礎学習から読み聞かせの「読み」「書き」をテーマに日本語の総合的な指導を目指した。まずは, 本に興味をもたせ, 動機を高めさせ話し言葉と書き言葉の違いを意識できるようにしたり, 高学年は意識するだけではなく, 文章化できるようにした。期末には学習のまとめを作文にして一人, 一人発表した。又, 毎回15分くらい自己紹介, カレンダーの日付と曜日の練習, 「かんじだいすき1～4」で漢字を筆順に留意しながら丁寧に書く練習をした。その他, 待ち時間の宿題など, 家庭のフォローもでき, 生徒達の居場所にもなっている。

教材： 教科書, 絵本, 教科書ドリル, かんじだいすき一～四, 時間割表, その他各種副教材

■開催形態2：「親子の日本語教室」(実施期間：平成14年度～16年度の3年間)

日時： 6月, 11月, 2月, 毎週火, 水, 木曜日の夜間 1日90分×10日×9回

活動場所： コミュニティーハウス(公立小学校に併設)

受講者数： 保育園児3名, 小学生7名, 中学生8名, 保護者10名

クラス： 1クラス 毎回90分授業

学習内容： 「親子の日本語教室」は保護者が子供の学校生活を理解しやすいカリキュラムとなっていて, 「リソース型生活日本語」に沿いながらも, 公立小学校の年間行事表や給食の献立表を読む, 校内施設をめぐるなどで実践的な勉強も取り入れて, 子供達の学校生活を理解できるようにした。

教材： 「リソース型生活日本語」, 公立小学校の年間行事表, 給食献立表, 各種副教材

Ⅲ. 今後の課題： 地域の学校・NPOと専門家との連携協力。同事業の継続の必要性。地域の行政の理解の促進。

第2分科会（80年館オーロラホール）

- テーマ：「日本語教育のための社会言語学 ―地域の言葉の扱い方―」
- 趣 旨：生活のための日本語教育においては、その地域で実際に使われている言葉を指導する必要がある。地域の言葉による教材を作成し、活用する方法を具体的な例とともに紹介することで、よりよい支援活動の在り方を検討する。
- 講 師：高木 裕子（実践女子大学教授） （敬称略）

高木 裕子（たかぎ ひろこ）

実践女子大学人間社会学部教授

専 門：日本語教育学，教育工学，情報科学

略歴等：国際基督教大学大学院・東北大学大学院修了。関西外国語大学外国語学部専任講師，山形大学教育学部助教授，山形大学大学院教育学研究科教授を経て，平成16（2004）年4月より現職。平成8（1996）年に「山形地域語研究会」を立ち上げる。平成9（1997）年には文部省（現文部科学省）科学研究費補助金を得て，方言を含む山形 of 言葉（地域語）を調査する。また，外国人に対する地域語教材として，『やまがたことばを学ぼう』を共同開発。本教材は第6版まで版を重ねる。さらに，『生活講座のためのいっしょに歩もう山形』を監修，執筆する中で，地域語を日本語教材の中で取り上げる。『2002年日本語教育学会秋季大会』でのシンポジウム「日本語の地域差と日本語教育：日本語のバリエーションと日本語教育」ではパネリストとして地域語について発表。『2004年日本語教育国際研究大会』の「ワークショップ・セッション7 日本語教育における社会言語学」では地域語の扱いと教材化について話す。

平成7年～9年度文化庁委嘱事業「山形市地域日本語教育推進事業」推進委員会委員。

主著書：『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』（共著，創拓社，1995）

『日本語教育指導参考書21 視聴覚教育の基礎』

（共著，国立国語研究所・大蔵省印刷局，1995）

『いま！日本語ボランティア「日本語ボランティア講座」（山形）』（共著，凡人社，1996）

『日本語教師トレーニングマニュアル6 日本語の文字・表記入門』（バベルプレス，1996）

『生活講座のためのいっしょに歩もう山形』（共著：山形市交流協会編，2002）

『自治体の言語サービス』（共著：春風社，2004）

文部省特定研究調査報告書『国際化時代の地方都市と外国人』（共著，山形大学，1998）

平成9年度～11年度 文部省科学研究費補助金基礎研究基盤(B)(2)研究成果報告書『定住型外国人を対象にした“地域共通語”教材開発に関する研究』（研究代表者：高木裕子 研究課題番号：10480048）

『やまがたことばを学ぼう』（CD-ROM付）（共著，山形地域語研究会）

「日本語方言の自然習得」『日本語学』3月号 vol.24（明治書院，2005） 他



<メモ>

B: なるよ。 　　いつ、探すのっだん。
 A: マジで? もう決まってんのそれ、 　　A: 自分でー?
 　　なんか、 　　B: んだから、3月で辞めで行がんなねっ
 B: え、決めでんの、 　　ちゅうのよ。 　　伊藤(2004)より引用

4. 上記3. の会話例2での「方言と『全国共通語』との対応関係」、及び、「談話機能上の使い分け」
 参考: 高木(2005) 【結果は当日示します】

Ⅲ. 地域社会に暮らす定住外国人の日本語—山形市の場合—

1. 定住外国人の方言に対する意識と言語環境 【結果は当日示します】

2. 二言語環境—① 教室習得と自然習得
 　　② 方言の自然習得と母語の影響
 　　③ 誤用なのか、母語の影響か
 　　④ 会話スタイルの変化

3. 外国人の日本語と日本人の日本語例

F1: はい。でも、難しいです。

F2: あー、そうですか。それ、難しいじゃないですか。(韓国での韓国人)

J1: あっ、本当ですか。って言うか、〇〇とか〇〇とかあって、ちょっと難しくなんかないですか。

J2: はあー、それはそうですね。でも、ちょっと難しいじゃないかなと思ったりもして。実際はどうなんですか。 【Fは外国人、Jは日本人】

・早く食べろ。食べー。(山形での韓国人) 　　・早く食べなさい。(韓国での年輩韓国人)

定住外国人の会話例1 (日本人とのインタビューで)

N S: それって、日本語がわからないからですか?

NNS: わからないじゃなくて、わかってもしない。で、それも不思議だなー。うん、私が前 二人が話も聞いたけど、自分も会社も こゆう二人 前も そんなけんかしてから辞めた。やっぱり残念なんですけど。例えば、会社に言われたら、そうゆうふうにして、でも、そうゆうふうにはしなかった。なんぼゆっても、何人から言われても、結局、言われたとおりはしなかったんです。で、途中で「辞めるはー」。そのままに いつちやった。

4. 定住外国人の会話例2

(1) あん時 やんだ、やんだ、ストレスたまり過ぎて。やっぱ 上の子、そうゆう 環境さ置いて 悪っ、悪いと思った。毎日 けんかばかりで、実家さ行った。

(2) でも、私としては、ほんとはやんなんだけれど、結局は自分のためね。やらないいいといけませんけど。結局言われたら、わかりました。でも、まだ当番とかしてない、なかった。今年は私じゃないだから、多分来年、来年だと。どっちかなー。

(3) こっから、何分ぐらいで、左に入れば、あるっとか。そうゆう、全部覚えて。行って、こうなに 止まって。—(中略)—近いけど、一番 しょうがないなあ。 じゃー、バス乗るかー。

Ⅳ. 地域の言葉を教材化にしてみる

1. 教材化でのQ&A

(1) 話している日本語をそのまま教材にするのか。 (6) 在留資格別教え方

(2) 誰がどんな日本語を必要としているのか。 (7) 学習項目と内容

(3) 方言を話させるのか、方言を教えるのか。 (8) 音声教材と映像教材

- (4) 自然な談話資料はどのようにして採るのか。 (9) マルチメディア教材
 (5) どのようにして使い分けをさせるのか。 (10) ネイティブとノンネイティブ教師

2. 教材開発までの手順

- ①「教材開発のための基礎調査」→②「教材化までの地域語の整理」
 →③「教材化の実際」

①「教材開発のための基礎調査」

【留学生の場合】目標 聞いて理解する

留学生に対する調査

- 1: 留学生の言葉の調査
- 2: よく聞く地域語の調査 (聞き取り)
- 3: コミュニケーション上で問題になる地域語の調査 (聞き取りとアンケート)

日本人に対する調査

- 4: 留学生が接する頻度の高い年代の日本人が使う地域語の調査

→②「教材化までの地域語の整理」

- 1: 学習項目の決定
 - ・初級文型に対応する地域語の形の抽出 (ここでは日本人によく使われ、留学生が耳にしやすい地域語を使用頻度から求めた)
 - ・初級教科書の地域語への置き換え
 - ・置き換えた地域語例文の検討
 - ・例文の修正
- 2: 地域語の整理
 - ・使用頻度による整理 (「入門編」での教師用資料とする)
 - ・発話機能による整理

- 3: 会話録音

→③「教材化の実際」

- 1: 「入門編」と「応用編・実践編」 (印刷教材と聴解用音声教材・CD-ROM版)
- 2: マルチメディア教材 (試作版)

【その他】教材の使用及び教材を使った指導に先立ち、学習者に対し「学習者の地域語に対するニーズ調査」として調査票で調査を行なっている。また、実際の指導では、指導者が必ずしも地域語話者とは限らない場合もあったため、使い方の解説や指導のポイントも、方言についての説明と共に行なったり、教材に付けたりもしている。

V. まとめー地域の日本語教育で指導するものは何かー

・「第二言語としての日本語は、地域性なしには存在しえない母語との対象でとらえることになる」(沖 2001 pp. 21)

・「日本語支援は基本的に生活支援であり、生活者のほとんどはその生活の営みの中で日本語を自然習得していると考えられるー(中略)ーその自然習得が促進されるよう支援していくのが日本語支援の基本的な役割ではないかと思われる。」(長友2005 pp. 42)

【定住外国人の場合】目標 理解して使い分ける

定住外国人に対する調査

- 1: 定住外国人の言葉の調査
彼らが接する場面での自然な談話資料やコミュニケーションで必要な談話資料を採る

- これを使い、適切な使い分けの練習をする
- 2: 彼らがコミュニケーションで必要な場面を形態面(や語法)・機能面から設定して、会話文として提示する

- できれば、上記のようなものと比較してみる

日本人に対する調査

- 1: 地域に住む日本人の自然な談話資料や外国人とコミュニケーションしている時に使っている談話資料を採る

- これらを使って、聴解練習する (内容理解重視。理解できない時に説明)

参考文献：

- 伊藤かおり(2004)『山形市における方言と共通語の使い分けに関する談話的研究』
(山形大学大学院教育学研究科提出修士課程学位論文)
- 沖 裕子(2001)「日本語教育学と方言学—学の樹立改変と談話研究への広がり」、『國文学』10月号, 学燈社, pp. 88-93
- 高木 裕子(1999)『定住型外国人を対象にした“地域共通語”教材開発に関する研究』
(平成9年度～11年度 文部省科学研究費補助金基礎研究基盤(B)(2) 研究成果報告書
研究課題番号: 10480048)
- 高木 裕子(2002)「日本語の地域差と日本語教育: 日本語のバリエーションと日本語教育」, 『2002年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 日本語教育学会, pp. 25-29
- 高木 裕子(2005)「日本語方言の自然習得」, 『日本語学』3月号 vol. 24, 明治書院, pp. 58-75
- 高木裕子・後藤典子・山上龍子・渡辺文生・佐々木範子・趙恩嬉・林美和(1997)
「留学生に対する方言教材開発の試み—山形市における地域語を基礎として—」, 『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 日本語教育学会, pp. 111-116
- 高木裕子・後藤典子・山上龍子・渡辺文生・佐々木範子・趙恩嬉・林美和(1998)
「山形市在住留学生に対する地域語教材」, 『山形大学紀要(人文科学)』第14巻1号, 山形大学, pp. 71-91
- 高木裕子・森谷真由子(2004)「地域日本語教育における遠隔教育を可能にする地域密着型マルチメディア教材の開発とそのためのシステム構築」, 『2004年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 日本語教育学会, p. 11
- 高木裕子・渡辺文生(2003)「山形県地域別言語調査にみる『地域共通語』—定住外国人のための教材開発を通じて—」, 『日本方言研究会第76回研究発表会発表原稿集』, 日本方言研究会, pp. 59-66
- 長友 和彦(2005)「第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界」, 『日本語学』3月号vol. 24, 明治書院, pp. 32-43
- 深瀬 智子(1998)『村山地域における若者の話し言葉—「気づかれない方言」をめぐって—』
(山形大学教育学部小学校教員課程卒業論文)
- 山形市交流協会編(2002)『生活講座のためのいっしょに歩もう山形』(日本語版)
- 山形大学(1998)『国際化時代の地方都市と外国人』(文部省特定研究調査報告書)
- 山形地域語研究会編(2001)『やまがたことばを学ぼう』(CD-ROM付) 第6版

第3分科会（学園本部館大会議室）

- テーマ：「異文化コミュニケーションの日本語教育への活用」
- 趣旨：異文化とは何かについて考えるとともに、異文化コミュニケーションのトレーニング方法を紹介していただき、日本語教育での活用を検討する。
- 講師：山本志都（青森公立大学助教授） （敬称略）

山本 志都（やまもと しづ）

青森公立大学経営経済学部助教授

専門：コミュニケーション学，異文化コミュニケーション教育

略歴等：関西外国語大学外国語学部卒。Portland State University大学院Speech Communication学科修了。上智大学文学部教育研究科博士後期課程満期退学。オレゴン州ポートランドでAmerican Heritage Association異文化研修講師，Marylhurst University非常勤講師を勤め，帰国後，桜美林大学等での非常勤講師として異文化コミュニケーションと英語教育に携わった後，平成10（1998）年より現職に就き対人コミュニケーションとプレゼンテーション（日本語）を中心にコミュニケーション科目を担当。

主著書：『異文化コミュニケーション・ワークブック』（共著，三修社，2001年）
『Global Competence: 50 training activities for succeeding in international business』（共著，Human Resource Development Press，2000年）



<メモ>

<メモ>

異文化感受性モデルの学習への応用

異文化コミュニケーションの日本語教育への活用

1 異文化感受性モデル (Bennett, 1986, 1993)

1) 異文化感受性モデルとは

異文化をどのように認知し評価しているかを示す個人の世界観における異文化体験の複雑性を、構成主義と現象学の立場から認知的複雑性理論を背景に6つのステージで表そうと試みたモデル。このモデルには限界もあるが、異文化コミュニケーション教育において題材を選択したりカリキュラムを考えたりする上で役に立つ示唆を得られる。

2) 自文化中心的段階と文化相対的段階

6つのステージは大きく2つの段階にわかれている。

異文化感受性モデル (Developmental Model of Intercultural Sensitivity)

自文化中心的段階 (Ethnocentric Stages)			文化相対的段階 (Ethnorelative Stages)		
ちがいの 否定 (Denial)	ちがいからの 防衛 (Defense)	ちがいの 最少化 (Minimization)	ちがいの 受容 (Acceptance)	ちがいへの 適応 (Adaptation)	ちがいの 統合 (Integration)

Bennett, 1986, 1993より作成

① 自文化中心的段階

自文化中心的段階は、自分自身の「現実」のあり方のみを座標軸として物事を捉え、優劣を判断するような世界観を示す。文化的なちがいをどの程度認識するのか、何を差異、または相似点として捉えているのか。またそのことに対する評価は肯定的か否定的か、差異を強調するのか、相似点を強調するのか等が焦点になっている。

② 文化相対的段階

文化相対的段階では、文化によって座標軸が異なり、認識している「現実感」も異なることを認めるような世界観を示す。行動様式や価値観における文化的なちがいを認め、自文化では不適當に思えても他文化では適切なコミュニケーション・スタイルや価値観があることを理解し、自分でも文脈に合わせて実践することができるようになる。実践を通じて内在化された異文化体験は、やがて自分の中に今までと異なる見方や考え方で物事を捉え理解することを可能にするような世界観を構築することを示す。

3) 異文化感受性モデルの6つのステージ

① ちがいの「否定」

文化的ちがいは見過ごされて知覚されなかったり、知覚された場合でも個人にとって「たいして意味の無い」一過性のものとして処理されたり、ちがいが好ましくない場合は見て見ぬふりをして否定してしまうため、ちがいの存在が「実感」されない。実感されないため自分の世界観は脅かされず、ちがいに対して特に否定的な気持ちは持っていない。

② ちがいからの「防衛」

これまで見えていなかったり、見ても見ぬふりで済ませていた文化的ちがいが、自分の体験の中で「存在するもの」として実感されるようになる。異なるものから自分の世界観を守るための防衛戦略として、ちがいを否定的に見なしたり、ちがいに対して優越感を持ったりする場合がある。「われわれV.S. 彼ら」の二元論的な見方をし、善悪の尺度に自文化の物差しを使用しがちである。

③ ちがいの「最少化」

ちがいがあることを表面的な部分（服装・食物・慣習等）では認めていながらも、人間の持つ普遍性を重視し強調することで、共通部分と比較するとちがいは影響の小さいものとして位置づけるような世界観。宗教・経済・科学的根拠をもとに普遍性を唱えたり、人間の生物としての身体的共通項を強調する。「人間として皆同じ」が前提のため、ちがいを認識しても自分の世界観の中に確立しているカテゴリーにあてはめて、自分達のは少し違った一種のバリエーションであると捉える傾向がある。

④ ちがいの「受容」

他文化の人が自分と同じ見方をしているわけではなく、価値観が異なりそれに伴う行動様式やコミュニケーション・スタイルもちがうということに気づき、受け入れる。ちがいを異なる世界観の産物として捉える。

⑤ ちがいへの「適応」

受容から一步すすんで、異なる世界観に感情移入（Empathy）し見方をシフトすることができる。ちがいを自分の世界観の範囲内でそのまま模倣するのではなく、そのちがいを生み出している、自分のものとは異なる世界観に感情移入して、そこから考え、行動するという意味での適応である。さらに、新しい世界観が自分の既存の枠組みにつけ加えられて、それも自己のアイデンティティの一部になるというサブカテゴリー（多元主義・Pluralism）も提示されている。

⑥ ちがいとの「統合」

「適応」では自己のアイデンティティが2つ以上の文化的枠組に存在する可能性が示されたが、「統合」では状況に応じてどちらの世界観からも対応でき、そのような自己のあり方自体にアイデンティティを見出す。すなわち、世界観が我々のものの見方や考え方に影響を与えると同時に、我々自身はその世界観にはたらきかけることができるという相互作用性に気づくと、その場に応じて自己のアイデンティティを定義づける自分というあり方が見出され得る。

1) 学習者の異文化感受性発達に応じた題材選びの必要性

学習者の異文化感受性に対応して題材を選ぶことで異文化理解の促進に役立つようにする。たとえば、「防衛」段階にある学習者に対して、日本の会社における上司と部下の関係を題材に取り上げた授業を行った場合、理解よりも嫌悪感を持たせてしまう可能性もある。同じ題材でも「最少化」段階にある学習者の場合は「自分の国でもこういうことはある」と主張し、ニュアンスの違いや背後にある考え方の違いに目を向けないこともある。「受容」段階の学習者であれば、上記のような事例を示されることで、異なる文脈における行動様式や価値観への理解を深められる。

各ステージにおける認知面での異文化理解促進のために

「否定」： 日本の食物、祭事、音楽など、学習者が楽しめて表面的にわかりやすい題材。

「防衛」： 学習者の文化と日本文化に共通している制度を取り上げたり、学習者と日本人が人間として共有する部分に焦点をあてたり、両者が共に達成したいと願う目的に目を向けるような題材。

「最少化」： 価値観について内面的な意味を具体的にみていくことや、行動様式において具体例を挙げていくような題材。たとえば、「親を大事にする」という価値観自体は一見、日本でも他国でも「同じ」価値観であるようでも、何を尊重することが親を大事にすることか、どう接することが大事にしていることを表すのか、などは異なるかもしれない。同様に、「挨拶する」行為は、日本でも他国でも「同じ」行為に思えても、どんな場面においてどのように行うのが適切か、挨拶をするという行為が意味することは何であるか、などは異なるかもしれない。このように詳細に意味するところを検討することで、認知的複雑性を高めるような題材。

「受容」： 価値観・行動規範の自文化・他文化の事例を広く検討するような題材。

「適応」： ケース・スタディーで模擬的に日本文化の視点に立った解釈を試みたり、ロール・プレイで日本のコミュニケーション・スタイルを学習するような題材。

「統合」： 学習者が文化的文脈において自己のあり様を見つめることを手助けするような題材。

2) 日本語教育への応用

参加者の皆様のアイデアをうかがう。

参考文献

- Bennett, M. J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 170-198.
- Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience*. Yarmouth, ME: Intercultural Press, 21-71.
- 八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美 (2001) 『異文化コミュニケーションワークブック』三修社.
- 山本志都 (1998) 「異文化センシティビティ・モデルを日本人に適用するにあたって：再定義の必要性について」『異文化コミュニケーション』第2号, SIETER Japan.

第4分科会（グリーンホール）

- テーマ：「JSLカリキュラムの理解と地域における支援の在り方」
- 趣旨：JSL（第二言語としての日本語）カリキュラムの概要について紹介していただき、言葉と教科学習を結び付けていかに指導すればよいか等、地域における外国人年少者支援活動について考える。
- 講師：川上 郁雄（早稲田大学教授） （敬称略）

川上 郁雄（かわかみ いくお）

早稲田大学大学院日本語教育研究科教授

専門：日本語教育，文化人類学（博士（文学））

略歴等：平成2（1990）年，大阪大学大学院文学研究科博士課程修了後，平成4（1992）年までオーストラリア・クイーンズランド州教育省日本語教育アドバイザー（国際交流基金派遣日本語教育専門家）。平成5（1993）年，宮城教育大学の日本語教育担当教官（助教授）として赴任，宮城教育大学教授を経て，平成14（2002）年，早稲田大学日本語研究教育センターに教授として赴任。平成15（2003）年より現職。平成14（2002）年より文部科学省の「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発に係る協力者会議」の委員を務める。

主著書：『異文化理解と情報』（共著，東京法令出版）

『越境する家族－在日ベトナム系住民の生活世界』（明石書店） 他



<メモ>

<メモ>

「JSLカリキュラムの理解と地域における支援のあり方」

1. JSLカリキュラムの考え方

- ①内容とことばをどう結びつけるか
- ②学習活動単位(AU)
- ③授業をどうつくるか
- ④授業づくりのポイント

2. JSLカリキュラムの実践例

- ①国語
- ②算数
- ③理科
- ④社会

3. JSLバンドスケールの考え方

- ①「日本語指導が必要な子ども」とは誰か
- ②バンドスケール(Bandscales)とは何か
- ③どのようにして使用するか
- ④なぜ言語能力を把握することが重要か

4. JSLバンドスケールの実践例

- ①小学校
- ②中学校
- ③個人ファイル化
- ④複数視点による協働的把握⇒協働的实践

5. 地域における支援のあり方

「早稲田モデル」を例に：日本語支援の5つのポイント

- ①個別化
- ②文脈化
- ③段階化
- ④論理化
- ⑤統合化

第5分科会（80年館オーロラホール）

- テーマ：「地域における日本語学習リソースの活用について」
- 趣旨：海外及び日本国内の学習者を対象に行った調査の結果をもとに、学習者がどのように日本語学習の「リソース」（教育及び学習に用いられる人、物、場や機会）を活用しているのかを紹介し、学習リソースという観点から地域においてどのような学習支援が可能かについて考える。
- 講師：小河原義朗（国立国語研究所研究員）
岡部真理子（国立国語研究所非常勤研究員）（敬称略）

小河原 義朗（おがわら よしろう）

国立国語研究所日本語教育部門研究員

専門：日本語教育

略歴等：東北大学文学部日本語教育学研究室助手、国立国語研究所日本語教育センター第一研究室研究員を経て、平成13(2001)年4月から現職。

主著書：「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ調査報告—」『2004年日本語教育学会国際研究大会予稿集発表1』 pp. 131-136 小河原義朗他(2004)

「日本語学習者はどのようなリソースを用いているのか？」『国立国語研究所公開研究発表会』 pp. 9-18 小河原義朗(2004)

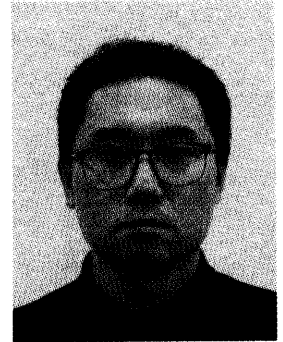
「学習者は何をどのように用いて学習しているのか？—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『韓国日本学会第70回学術大会予稿集』 pp. 486-492 小河原義朗他(2005) 関連報告書（入手先：jkasai@kokken.go.jp）

『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 タイ（バンコック）アンケート調査集計結果報告書』国立国語研究所(2003)

『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 韓国アンケート調査集計結果報告書』国立国語研究所(2004)

『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 台湾アンケート調査集計結果報告書』国立国語研究所(2005)

『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 マレーシアアンケート調査集計結果報告書』(近刊) 国立国語研究所(2005)



岡部 真理子（おかべ まりこ）

国立国語研究所日本語教育部門非常勤研究員

専門：日本語教育

略歴等：国際基督教大学助手、カリフォルニア大学バークレー校招聘講師、モナシュ大学講師を経て、平成13(2001)年より現職。都留文科大学非常勤講師、山梨大学非常勤講師を兼任。

主著書：『日本語学習CD-ROM クリックeコミック コボちゃん』（監修、発売元：株式会社凡人社、企画・制作：株式会社林事務所、原作：植田まさし／蒼鷹社）



<メモ>

地域における日本語学習リソースの活用について

趣旨

海外および日本国内の学習者を対象に行った調査の結果をもとに、学習者がどのように日本語学習の「リソース」(教育及び学習に用いられる人、物、場や機会)を活用しているのかを紹介し、学習リソースという観点から地域においてどのような学習支援が可能かについて考える。

ねらい

- ・学習者の学習環境・学習リソースに関する現状についての理解を深める
- ・学習者の学習環境・学習リソースに関する情報収集の方法についての理解を深める
- ・現在の支援のあり方を振り返りつつ、リソースの観点からどのような支援が考えられるのかについて考える

1. 調査研究の背景

- ・多様化の背景
- ・多様化の現状を踏まえた上で新たな支援のあり方の検討の必要性
- ・国立国語研究所 「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」

目的

概要

2. 量的調査の結果から

2-1 アンケート調査結果から

どのような学習リソースにどのように接触しているのか(タイ・韓国・台湾・日本)

①人

②物

③場・機会

- ・国内外での学習リソースへの接触の違い
- ・目的や動機に応じた学習リソース利用
- ・接触のための情報の提供
- ・日本語の教室と学習リソースとの関係

2-2 インタビュー調査結果から

どのようなリソースにどのように接触しているのか

- ・ 学習者個別のリソースとの接触
- ・ 動機とリソースの広がり
- ・ 接触のための情報

3. 質的調査の結果から

人的リソースの担う役割

- ・ ことばを教える／説明する
- ・ 日本語のモデル提示，チェックおよび訂正
- ・ 物的リソースを広げる
- ・ 人的リソースを広げる
- ・ 行動範囲を広げる

学習リソースとの接触に影響すると考えられる要因

(人的リソースとの関係構築および関係維持)

- ・ 時間の経過
- ・ とともに過ごす時間・機会
- ・ 自由に集える場
- ・ 物理的な距離
- ・ キーパーソンの存在
- ・ 学習者の日本語能力／支援者の外国語でのコミュニケーション能力
- ・ 興味や関心の分野
- ・ 学習者と支援者の関係

すべてを受け入れてくれる支援者

お互いに尊敬しあえる存在である学習者と支援者

4. 学習支援として何ができるのか —リソースのデザイナー—

第6分科会（学園本部館大会議室）

- テーマ：「日本語学習支援に役立つ言語技術教育の技法について」
- 趣 旨：国際社会における言語技術教育の重要性についてお話しいただくとともに、その技法を御紹介いただき、地域における日本語学習支援への活用を考える。
- 講 師：三森 ゆりか（(有)つくば言語技術教育研究所所長）（敬称略）

三森 ゆりか（さんもり ゆりか）

(有)つくば言語技術教育研究所所長

専 門：言語技術（Language Arts）教育

略歴等：上智大学外国語学部ドイツ語学科卒。丸紅勤務後上智大学大学院中退。平成2（1990）年つくば言語技術教育研究所開設。麗澤中学・高等学校非常勤講師，（財）日本サッカー協会コミュニケーション・スキル専任講師，茨城県立中央看護専門学校講師，朝日カルチャーセンター講師など。

主著等：『論理的に考える力を引き出す』（一声社）

『絵本で育てる情報分析力』（一声社）

『イラスト版ロジカルコミュニケーション』（合同出版）

『外国語を身につけるための日本語レッスン』（白水社）

『論理トレーニングプリント』（PHP出版）



<メモ>

家族単位の学習者を支える日本語教育の在り方について考える

1. 家族単位で外国語学習をする場合に発生する問題点

(1) 逆転する親子関係

- ① 外国語を身につける速度の相違
- ② 親の通訳をする子ども
- ③ 言語面で自立を余儀なくされる子ども
- ④ 親に対する信頼の喪失

(2) 低下する母語力

- ① 成長段階にある子どもは新しい知識と共に言葉を身につけて行く
- ② 母語で知らない言葉を外国語で身につける
母語を外国語が浸食する
- ③ 子ども同士の会話が外国語に変容
親の分からない言葉で会話する子ども

(3) 親子のコミュニケーションの断絶

- ① 共通基盤の喪失
- ② 母国の文化の中に住む親と新しい文化の中に住む子ども

2. 「テキストの分析と解釈・批判」の導入

- (1) 親の威厳を失わないために
- (2) 大人自身が外国語を学ぶ楽しみを味わうために
- (3) 欧米系の外国人が自国で身につけた読解の技術を日本語に応用するために

3. テキストの分析と解釈・批判 (Critical Reading)

(1) 分析項目

- ① 構造
- ② 時制
- ③ 文章構成
- ④ 文法
- ⑤ 視点 (語り手)
- ⑥ テーマ
- ⑦ 設定 (時代背景・場所・時間・季節など)
- ⑧ 人物 (性別・年齢・出身・階級・職業・容姿・言葉遣い・性格・服装・持ち物・名前など)
人間関係
- ⑨ 象徴
- ⑩ 語彙 など

(2) 詩の分析

たき火

巽 聖歌 作詞
渡辺 茂 作曲

かきねの	かきねの	まがりかど
たき火だ	たき火だ	おちばたき
「あたろうか」		「あたろうよ」
きたかぜピープー		ふいている

さざんか	さざんか	さいたみち
たき火だ	たき火だ	おちばたき
「あたろうか」		「あたろうよ」
しもやけおててが		もうかゆい

こがらし	こがらし	さむいみち
たき火だ	たき火だ	おちばたき
「あたろうか」		「あたろうよ」
そうだんしながら		あるいてく

(昭和16年12月「NHK子供テキスト」)

(3) テクストの分析

赤ずきん

むかしむかし、小さなかわいい女の子がいました。ひと目見ただけでだれでも女の子を好きになりました。でも、この子を一番かわいがっていたのはおばあさんでした。おばあさんは女の子があんまりかわいくて、何をあげたらよいのかわからないほどでした。ある時おばあさんは、女の子に赤いピロートでできたずきんをあげました。このずきんがとてもよく似合ったものですから、女の子はこればかりかぶりたがりました。それで女の子は、「赤ずきん」と呼ばれるようになりました。

ある日、お母さんが赤ずきんに言いました。

「ちょっといらっしやい、赤ずきん。ここにケーキとぶどう酒が一本あるから、これをおばあさんに持って行ってちょうだい。おばあさんは病気で弱っていらっしやるけれど、これできっと元気になるわ。暑くなる前に出かけなさい。外に出たらお行儀よく歩いてね。道草はしちゃ駄目よ。そんなことをして転んで瓶を割ってしまったら、おばあさんにあげるものがなくなってしまうから。それから、おばあさんのお部屋に入ったら、忘れずに『おはようございます。』と言いましょね。部屋に入ったとたん、きよろきよろ見回すようなことをしてはいけませんよ。」

「だいじょうぶ。ちゃんとできるわ。」

赤ずきんはお母さんにそう言うと、お母さんの手を握って約束しました。

ところで、おばあさんは村から半時間ほど離れた森の中に住んでいました。赤ずきんが森の中に入っていくと、狼に出会いました。赤ずきんは狼がどんなに悪い動物か知らなかったので、狼を怖いと思いませんでした。

「こんにちは、赤ずきんちゃん！」

と狼が言いました。

「こんにちは、狼さん！」

「赤ずきんちゃん、こんなに早くどこにお出かけかい？」

「おばあさんのところよ。」

「エプロンの下に持っているのは何だね？」

「ケーキとぶどう酒よ。昨日お母さんとケーキを焼いたの。病気で弱っているおばあさんに持って行って、元気になっていただくの。」

「赤ずきんちゃん、おばあさんはどこに住んでいるの？」

「森の中よ。まだあとたっぷり 15 分くらいかかるわ。3本の大きな樫の木の下におばあさんのお家があるの。下にクルミの生け垣があるわ。狼さん、知っているでしょう？」

と赤ずきんが言いました。狼は、腹の中で考えました。『この、若くてやわらかそうなやつ。こいつはうまいご馳走だ。ばあさんよりもずっとうまいにちがない。狼さんよ、うまくやれよ。そうすりゃ二人ともいただきだ。』そこで狼はしばらく赤ずきんと並んで歩き、それからこう言いました。

「赤ずきんちゃん、ほら、ご覧よ。辺り一面にきれいなお花が咲いているよ。どうして周りを見ないんだい？ 君には聞こえないのかい？ こんなにきれいな声で鳥がさえずっているのに。

なんだか君はわき目もふらずに歩いているね。まるで学校へ行くときみたいだよ。森の中はこんなに楽しそうなのに。」

赤ずきんは目を上げました。そして、木漏れ日がちらちらと踊り、辺り一面に美しい花が咲き乱れているのを目にすると、こう思いました。『お花を摘んで花束を持って行ってあげたら、おばあさん、きっと喜んでくれるわ。まだ早いから、ちゃんとおばあさんのおうちに着けるわよ。』そこで赤ずきんは、道草して森の中に入り、花を探し始めました。一本花を摘むと、向こうにはもっときれいな花が咲いているように思えました。それで赤ずきんは、どんどん森の奥深くへ入って行きました。その間に狼は、まっすぐにおばあさんのところへ走って行き、戸を叩きました。

「外にいるのはだれだい？」

「赤ずきんよ。おばあさんにケーキとぶどう酒を持って来たの。開けてちょうだい！」

「取手を回しておくれ！」

とおばあさんが大きな声で言いました。

「私は弱っていて、立てないんだよ。」

狼は乱暴に扉を押し開け、一言も言わずにまっしぐらにおばあさんのベッドに突進すると、おばあさんを一口で飲み込んでしまいました。それから狼はおばあさんの服を着てずきんをかぶり、ベッドに横になって窓のカーテンを引きました。

そのころ赤ずきんは、花を探して駆けずり回っていました。そして、もう持ちきれないほどたくさん集めるとようやくおばあさんのことを思いだして、おばあさんの家へ向かいました。赤ずきんは、戸が開いているのを不思議に思いました。部屋に入るとなんだかいつもと違う様子です。『あら、まあ。私ったら、今日はなんでこんなに嫌な感じがするのかしら。いつもはおばあさんの所が大好きなのに。』

「おはようございます！」

と赤ずきんは大きな声で言いました。でも、何の返事もありません。そこで赤ずきんはベッドのそばへ行き、カーテンを開けました。するとそこにはおばあさんが寝ていました。おばあさんは顔が隠れるほどずきんをすっぽりとかぶり、とてつもなく奇妙な様子でした。

「まあ、おばあさん、何て大きなお耳なの！」

「おまえの言うことがもっとよく聞こえるようにさ！」

「まあ、おばあさん、何て大きな目なんでしょう！」

「おまえがもっとよく見えるようにさ！」

「まあ、おばあさん、何て大きな手なの！」

「おまえをしっかりと捕まえられるようにさ！」

「まあ、おばあさん、何てとんでもなく大きな口をしているの！」

「おまえをうまく喰えるようにさ！」

そう言ったとたん狼はがばっとベッドから跳ね起き、かわいそうな赤ずきんをがぶりと飲み込んでしまいました。

望みを叶えると、狼はまたベッドに横になりました。そして、大きないびきをかいて寝込んでしまいました。ちょうどその時、狩人がおばあさんの家の前を通りかかりました。そして、『おばあさんたら、何て大いびきだ。具合でも悪いといけないから、ちょっと様子を見てあげよう。』と考えました。部屋の中に入り、ベッドの前へ行ったら、狩人は眠りこけている狼を見つけました。

「こんなところにいやがったのか。この悪党め。ずいぶん長いこと探し回ったぞ。」

狩人はそう呟くと、鉄砲のねらいを定めようと思いました。けれどもふと、狼がおばあさんを食べているかもしれない、と思いつきました。まだおばあさんを助けられるかもしれません。そこで狩人は鉄砲を撃つのをやめ、代わりにはさみを取ってきました。そして、眠っている狼のお腹を切り開き始めました。2、3度はさみを入れると、赤いずきんが見えました。もう数回はさみを入れると、女の子が飛び出してきて、叫びました。

「ああ、驚いた。狼のお腹の中って真っ暗なんだもの！」

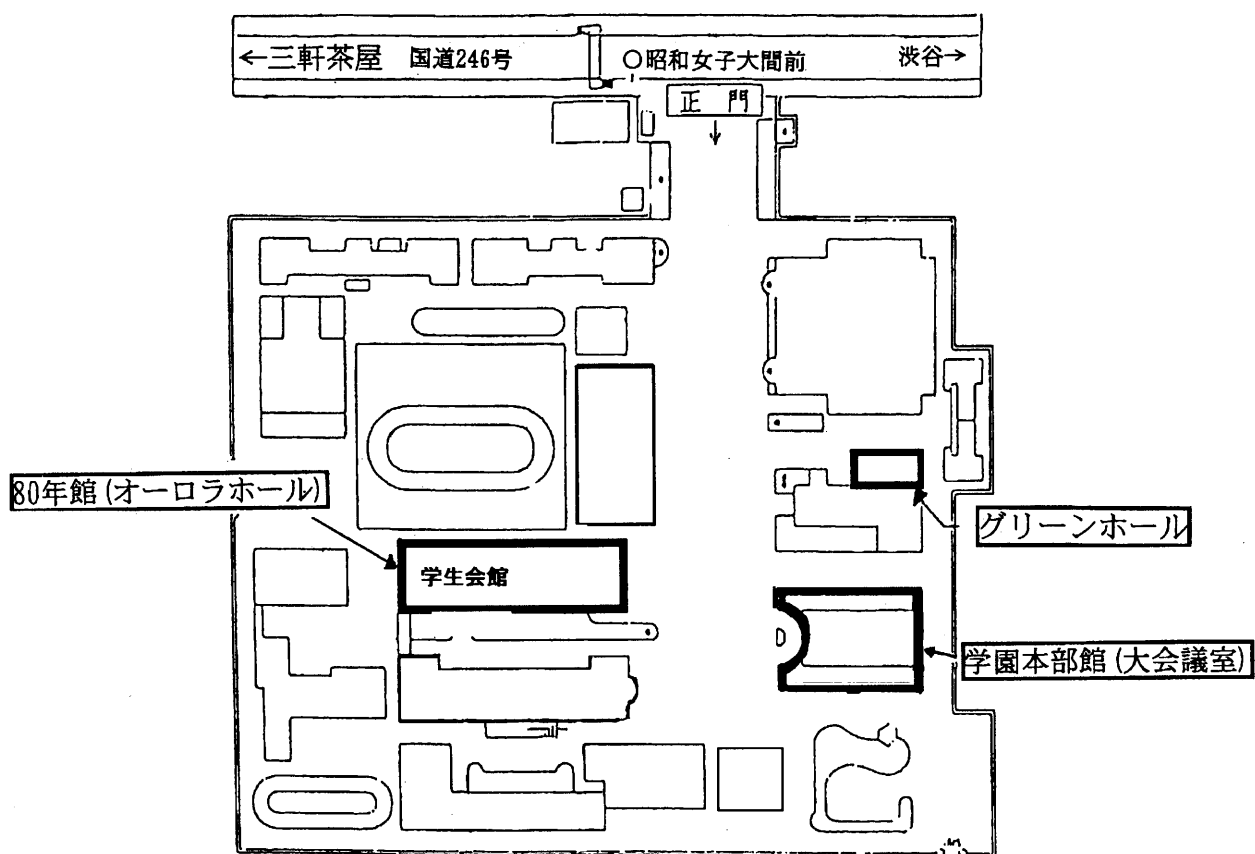
赤ずきんのあとから年取ったおばあさんも這い出してきました。おばあさんは息も絶え絶えの有様でした。赤ずきんはすぐさま大きな石を持ってきて、狼のお腹に詰め込みました。狼は目を覚ますと、飛び上がって逃げようと思いました。でも、お腹の石が重すぎたので、そのまま倒れ込んで死んでしまいました。

3人は大喜びです。狩人は狼の毛皮をはいで、それを持って帰りました。おばあさんは、赤ずきんが持って来たケーキを食べ、ぶどう酒を飲んで、元気を取り戻しました。ところで赤ずきんはといえば、『これからはお母さんが駄目と言ったら、絶対一人で森の中で道草しないことにしよう。』と思いました。

出典：「論理的に考える力を育てる② 絵本で育てる情報分析力」（三森ゆりか著・一声社）

グリム童話・三森ゆりか＋馬淵みか訳

昭和女子大学 構内図



※構内は、原則、禁煙，飲食禁止です。飲食は学生会館のホールでお願いします。

8月4日 (木)

日本語教育研究協議会(分科会)	会 場
第1分科会 伊東祐郎 (東京外国語大学教授) 「親子参加型の日本語学習支援の方法について」	グリーンホール
第2分科会 高木裕子 (実践女子大学教授) 「日本語教育のための社会言語学 -地域の言葉の扱い方-」	80年館(オーロラホール)
第3分科会 山本志都 (青森公立大学助教授) 「異文化コミュニケーションの日本語教育への活用」	学園本部館(大会議室)
第4分科会 川上郁雄 (早稲田大学教授) 「JSLカリキュラムの理解と地域における支援の在り方」	グリーンホール
第5分科会 小河原義朗 (国立国語研究所研究員) 岡部真理子 (国立国語研究所非常勤研究員) 「地域における日本語学習リソースの活用について」	80年館(オーロラホール)
第6分科会 三森ゆりか ((有)つくば言語技術教育研究所所長) 「日本語学習支援に役立つ言語技術教育の技法について」	学園本部館(大会議室)